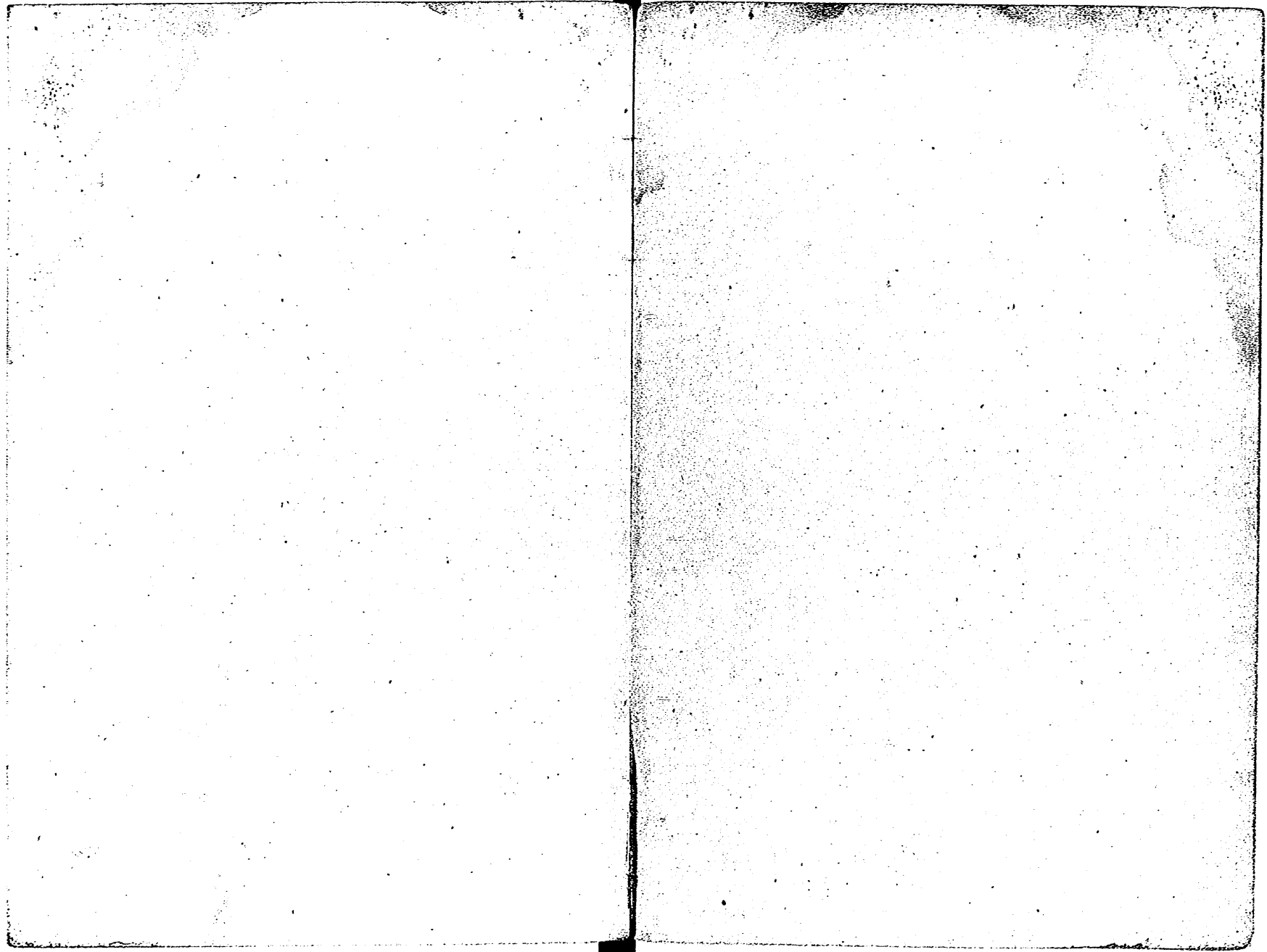
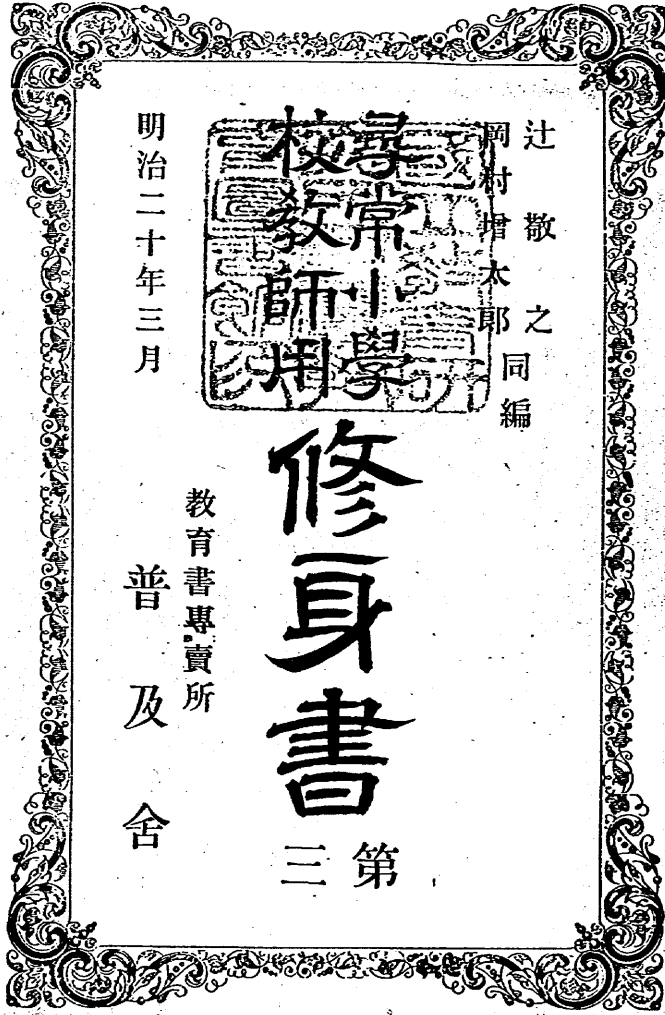


K121.1

1

3





辻 敬之 同編
岡村 增太郎



明治二十年三月

修身書

第三

教育書專賣所

普及舍

(一) 恩を施して報を得

〔報恩〕

佛蘭西のある都に一人の婦人ありけるが此の
人家富み財饒かにしてまた慈愛の心深かりし
かば常に貧窮のものを憐れみ施與を好みたり
しが一歳不慮の災難に罹りて其の財産を失ひ
しにぞ餘義かく都を立退きてとある田舎に住居
を求めたるが引續き貧窮に陥わり面白からぬ
月日を送りしに舊時召使たる雇人の一人思ひ
がけず尋ね來りて許多の金子を出しこれを婦

(問) 人ノ思フ
受クル者ハ
之ヲ報セザ
ルモ可ナル
ヤ否

人に贈りていふよう扱も某の御家に召使はれし日は海山の御恵を被り剩へ田畑居宅までも賜はりて妻子眷屬に至るまで餓へず寒へず世を送るゝとみなされ主君の御恩ありされば今主君の斯る御不幸を見て如何であれを救ひまからせ昔の恩義に報いざるべきといひけるとぞ

(二)旅人楓の樹下に憩ふ (報恩)

盛夏酷熱のゝろ二三輩の旅人暑氣にたへ兼ね

て路の傍に在る楓樹を見て其の蔭に憩ひ各樹の根を枕とし仰いで梢枝を眺め此の樹他の木と異かりて實を結ぶゝとあきのみならず其の材に至ては更に世間には無用の木ありと互に誹謗せる際内一人はこれを戒め諭して曰く君等は實に恩徳を知らざるの甚しきといふべし今目前我我の此の炎熱を凌ぐを得るは誰の功ぞ實に此の樹の恵を受くるにあらずやといひければ皆皆大に感じて過を謝したりと菲浮薄情

の輩は其の蒙れる恩惠の中に坐して其の恩人を毀るに至る世の報恩を知らざるものは此の事を見て以て自ら戒むべきあり

格言

西諺に曰く恩は借金の如く返却せざるべからず

参照

五代の時呂褒敵將の爲に破られ舉家皆死を客に趙玉と云ものあり其の孤呂琦を抱

きて逃れ市に乞ひ以て資く後呂琦晋に仕へ高官に昇るに及び深く趙玉を徳とし之に父事す其の病ある毎に親扶持し醫藥を供せりと云

(三) 心頭共に直し

(改過)

宋の徐積といふ人ある時人に語りけるは予始めて安定先生に見えたる時頭の容少しく傾きたりしに先生忽聲を厲まして頭の容を直くせばしと叱り給ひしかば其の時予是特に頭の容

(問)人ハ形ヲ
正シクスベ
シ然レドモ
徒ニ形ヲ正
クスルノミ
ニシテ可ナ
ルベキヤ如
何

のみならず心もまた直くせざるべからずと思
ひけりされば先生に見えて教戒を受けたるよ
り以後は能く邪心を絶つに至りたりといひけ
るとぞ此の人の如きは善く師の教誡に従ひて
其の過を改めたるものといふべし

(四) 三士節を折りて名士となる

(改過)

唐の趙武孟といふ人少くして游獵し獲たると
みろの肉を其の母に饋りしに母泣きて云ひけ

るは汝書を讀むふどを好まずして斯く放蕩な
り吾何をが望まんとて其の肉を捨てて食はざ
りしかば武孟これに感激して志を改め遂に力
學して大に名をかしたるが後臺侍御史とあり
河西人物志を著はしたりまた魏の陽固も少く
して任俠を好み劍客と交りて生産の事に心を
留めざりしが年二十六にして始めて節を折り
て學問に心を傾け遂に博覽にして文才あるに
至りしとぞ

格言

易に曰く善を見ては遷り過
あれば改む
古語に曰く能く過を補ふも
のは君子なり

参照

田邊晋齋嘗て一友人の家に詣り夜深て返
る從僕門に立ち寒に堪ざるを見る勞して
曰く我れ人の許に適き自安飽を汝等獨り

此の若きに至る實に余が過ありと是より
公事に非ざれば夜行せず

(五)木像に事ること生けるが如

(孝道)

漢の世に河内の人にて丁蘭といへるものあり
しが少くして父母を失ひ愛慕の念止め難くそ
の奉養をるゑと能はざりしを打嘆き木を
刻みて肖像を造り朝夕みれに向て禮拜し恰も
生ける親に事ると同じく去たりき蘭が隣家に

張淑といへるものありしがある日張淑の妻蘭の妻に物を借らんと頼みければ蘭が妻先づ木像に問ふて兎も角もせんとてやがて辻占を以て木像に伺ひしに不吉かり去かば斷りて貸さざりしを張淑聞て大に怒り酔に乘じて木像を罵り杖を以てその首を敲けり蘭他より歸り來りて事の始末を妻に聽き悲み憤りておれを官に訴へたるに官その孝行を嘉みして門閭に旌表したりしといふ

(六)畫像によりて亡父を知る

(孝道)

隋の世に汝郡の人にて徐孝肅といへるものあり早く孤子とありてその父を知らざりしが年長じて父の容貌を母に問ひ畫工に請ひて父の肖像を描かしめ日日物を供へておれを祭れり又その母に事ふるおと温順にして數十年の間一度たりとも忿怒の顔色なく母歿せし時は悲慟して身體瘠せ衰へ見る人悲み痛まざるもの

あかりしといふ

格言

死せるに事ふること生ける
に事ふるが如くせよ

参照

後漢の蔡順至孝あり太守韓崇召して東閣
の祭酒と爲せ順が母平生雷震ある毎に順
輒家を圍り順此に在りと云て泣けり

(七)朱冲犢牛を争はず

(忍耐)

(問人ト事ヲ
争フト争ハ
ザルトハ孰
レカ優レル
ヤ

晋の時朱冲といふ人あり耕藝を以て業とあせ
しがある時其の隣家にて犢牛を一疋失ひみれを
索むるとて朱冲が家の犢牛を誤り認めて我が犢
かりとあしみれをひきて歸りしかど朱冲更に争
はず其の後隣家我が犢を林の邊にて見出せし
かば大に慙ぢて先の犢を朱冲に返しけりまた
近きあたりの家に畜はれたる牛放たれて朱冲が
田の禾稼を侵せしかども朱冲更にみれを怒ら
ず屢芻草を持ち往きて此の牛に飼ひしかば牛

の主大に愧ぢて其の後は牛を放たざりしとぞ

(八) ソクラテースの堪忍 (忍耐)

紀元前五百年代の頃希臘の國にソクラテースといへる學者あり性質短氣にして怒り易けれバ自ら堪忍してその怒を止めけり常に朋友に頼みて我れ若し怒を發せんとする勢あらバ忠告し給ひてよといひて若しその忠告にあふ時は口を閉ぢて無言にありぬある時人ありて手を舉て先生の片鬢を打ちたるに先生笑て兜を被ら

問我人ヲ禮スルニ彼我ニ答禮セザレバ怒ランカ如何

ざりしは我が不幸ありといへり又或途中に於て貴人に行逢ひぬれに禮を行ひたれども貴人は顧みざりしかバ友人ぬの有様を見て彼の男の無禮ある實に驚くべきあり我は傍らより視ても怒らざるを得ずといふ先生靜にぬれに答へて決して然らず人もし君よりも身の不行儀ある人に出逢ふぬとあらばぬれを笑ふも怒るの理はあかるべし彼の無禮あるもぬれと同じぬとにて怒るべき理あらずといへり先生の妻

(問)人己ヲ怒
ル者アレバ
己モ亦怒テ
之ト抗セン
カ或ハ徐ニ
道理ヲ論シ
テ彼ノ怒ヲ
折カンカ

は性質頑傲の婦人にて常に先生に對して失敬
を盡し無禮を極めたり或る日婦人大に怒るゝ
とありて往來にて先生に向ひ亂暴を働きしが
先生少しもみれにとりあはざりけり又ある時
婦人怒り狂ひけれバ先生戶外にいでてみれを
避けしに婦人益々怒りて二階に上り桶を倒に
して汚水を先生の頭に灌ぎかけたれども先生
は怒れる色もかく斯るはげしき雷鳴あれば夕
立雨も降る筈ありとて打笑ひしとぞ

格言

徳川家康曰く堪忍は無事長
久の基なり
語に曰く柔能く剛を制し弱
能く強に勝つ

參照

宋の富弼常に云ふ忍の一字は衆妙の門か
り若し清儉の外に又一忍字を加へバ何事
か辨ぜざらんやと一日人あり弼を罵る弼

知らざるものの如し傍者之を告ぐ彌曰く
他を罵るのみ傍者曰く否卿の名を呼べ
り彌曰く天下豈に同名あからんやと罵る
る者聞きて大に慙づ

(九) 門衛金を得て窮人に施す

(廉潔)

伊太利國のミランといふ都に一人の貧窮ある男
あり世を渉るたつきあきまま門番とありける
が或るとき不圖金子二百圓入りたる財布を拾

(問) 遺物ヲ拾
フテ其ノ主
ニ返ス時主
謝儀トシテ
物ヲ贈ラン
トスル時ハ
汝等之ヲ受
クベキカ又
初ヨリ此ノ
謝物ヲ欲ス
ルノ心アル
カ如何

ひしかどもみれを我が物にせんあどとは露バ
かりも思はず落とし主は定めて心配するあらん
どて金を拾ひたる由を市中に觸れて金の主を
求めたるに此の金を落したるは或る貴人にて
右の次第を聞き直に門番の處に行きて財布を
失ひしとのみとを語りければ門番はいよいよ
みの人は金の主に相違あきや否やを問ひ極め
確かある證據を得て乃彼の財布を返しければ
貴人は大に悦び其の恩を謝するため寸志とし

て二十圓を與へんとしたれど門番は受けとらず我は我が役目の當前を勤めしのみにておれが爲めに褒美を貰ふべき筋合あしとておれを辭退しけれバ貴人はまを感入り然らば責めては十圓にても受けられよ五圓ありとも納められよと言葉をつくしておれを與へんとせれども只管門番の役前を勤めしのみにておれがため一錢を受るべき理あしとて動くべき氣色あらざれば貴人もおれに當惑して遂に其

の財布を地に擲ち其の許にて少しの金をも受納せられずとあれバ此の財布は余が物にあらず余亦此の金を用ふる所あしといひければ門番已むおとを得ず貴人の意に任せて五圓丈け請取りしが直におれを土地の貧窮人に施し與へたりとぞ

二〇 廉士債を譲る

〔廉選〕

薩州鹿兒島野上橋通の藥舗山元某は性質至りて正直の人ありある時家の古帳簿類を取調べ

しに不圖亡父の代に石燈籠通の岡部某より金百兩を借用しれる趣の記とあるを見出して此の帳面の消へずあるは全く返済せられぬからん今迄知らずに打過ぎしは我が等閑ありとて早速岡部方に至り古帳面を調べし處亡父の代に貴家より金百圓を借用して其の儘返却せざるまどを見出したれば延引ながら態態推參せり去りながら數十年經しまどおれば其の利息を出さんには莫大の金員おれど御同様に先代

のまど且又是れまで相互に知らざりし次第おれば何卒元金百圓にて御勘辨下されたと就てに只今まづ此の金を差上置き不足は近日相違なく持參致せしとて懷中より金五十圓を取出し岡部の前に差置きけるに岡部は突然の事ゆゑ暫時は兎角の返答もあかりしがややありてそは先代の事にて御同様に知らぬ事おれば今更御返金おどには及ばぬと答へて差戻し山元はおほも是非に受納められたしと固く執て

承引かねバ岡部も困じ果て然らバ一應帳面を
調べんとて直に古帳簿を取出して見しが一向
に貸借の事は記載おしされバ愈請取るべきも
のにあらずとて又も差戻したりされバ山元は
わが心に安からざればせめて五十圓かりども
受取られよとて頻りに乞へど岡部はまた貴家
の帳面に記しありども當家の方に其の事の見
えぬ以上は決して御心配に及はずと固く辭じ
て承引かねバ山元は詮方おげに其の儘持歸り

しとぞ

格言

不義にして富み且貴きは浮
べる雲の如し

参照

後漢の時苗少くして清白善を好み惡を惡
む建安中壽春の令と爲る其の官に赴くや
薄釜車に乗り黃犢牛布被囊あるのみ歲餘
にして牛一犢を生む去るに及んで其の犢

を留め主簿に謂て曰令來る時本此の憤か
し是れ淮南の生む所ありと

(一一) ショングーの誠心賊を

欺かず

(德行)

波蘭國のショングーと云ふは人どあり慈善
の心篤く又よく人を教誡せし人なり或時夜中
に用事ありてとある山林の中を馳せしにはし
かく五七人の山賊の出來るに行遇ひけり此の
時常のものからんには必驚き恐れて逃げ避け

んふを思ふべけれどショングーは然らず
情思ふよう彼等のかく惡業を働らくは固より
好みてあれを爲せにはあらざるべし必や其衣
食の其の體に足らずして飢寒困窮の其の身に
迫るが故あるべし若し衣食にして既に充分あ
らんには如何にしてか斯く殘忍無慘ある營生
をかまべき思へば可憐の者共ありとて頻りに
慈悲心を惹起し遂に携へたりける金銀は更
かり持物乗馬あごまで残るものかく取り出して

(問) 誠心ヲ以テ人ニ接セバ盜賊ト雖感ズルニ足ルカ如何

賊に與へたるに賊魁と覺しきもの汝が持物は早や此にて盡きたるか若し猶所有あらば一物も残をまじと云ふにぞジョンゲーンは否とよ早や一物もあるまどふしとて往過ぎ三四丁も來りし時忽襟の中に藏めたる金あるまどを思ひ出し再び賊の在所に立戻りいひけるは我れ實に汝等を欺きたるにはあらず最前與へたる外に尙少しの金を持ちしを忘れたりとて取出して與へければ賊共は大に驚きて其の常人に

(問) モト惡心ナクシテ貧困ニ逼リ惡業ヲナスモノハ之ヲ憐マン乎如何

あらざるまどを知り遂に最前奪ひし品物を返し其の罪を謝らたりとぞ

(一一一) 女俳優波答の慈善 (德行)

英國著名の女優に波答と云ふものありある時馬車に乗りて野邊歩きたるに一人の盜賊出てみれを脅しければ波答騒きたる氣色もかく懷より一挺の短銃を取り出して賊を狙ひければ賊は大に慌て大地に平臥し僕固より盜賊にあらずただ家貧くして年老いたる親を養ふべ

きたつきあきにより心迷ひて斯る悪業を爲さんど今日はじめて思ひ立ちたり此の言努勞偽りにあらず冀くは僕が罪を赦し玉へと涙を流して謝しければ波答其の言の詐りからざるを察して其の情を哀れみ懐より少しの金を出しておれを與へ且つ忙はしく車を馳せて其の家に到りて見るに如何にも其の言ふ所に違はざりければ益とおれを隣みて我が知れる人人に情を語りて遂に六十封の金を醸して此の賊に

贈り與へたりとぞ

格言

西諺に曰く已に敵するものはこれを愛せよ

参照

後漢の陳寔人を待つおと至厚かり凶歳のとき盜あり夜其の室に入り梁上に止る寔陰に之を見る子孫を呼て之に訓へて曰く夫れ人は自ら勉めずばある可らず不善の

人未必しも本より悪かるにあらず習て以て性を爲し竟に此の如きに至る梁上の君子是ありと盜驚きて地に投し首を叩て罪を謝す寔の曰く君が狀貌を視るに惡人に似ず貧困の故からんと乃絹壹疋を遺る

(二三)周瑜の大量

(謙遜)

支那三國の時吳の大將周瑜は少きより大名ありし人ありときに程普といふ人あり己の年の周瑜より長じたるを以て數周瑜を輕しめ悔り

(問)人已ヲ輕
悔スル時ハ
之ト短長ヲ
較ベンカ如
何

しかど周瑜は節を折りて之に下り終に與に其の短長を較べざりき然るに普後に至りて漸漸自ら敬服して周瑜と交るは醇醪を飲むに同じ覺へず知らず自ら醉ふと言ふに至れりされバ時の人皆周瑜の謙讓にして能く人を服せる徳あるまどを稱賛しけるとぞ

(二四)己の長を以て人を凌がず

(謙遜)

春澄善繩は幼より智慧人に勝れたればその父

(問人ト短長
ヲ較ブルハ
品行上ニ於
テ如何

豊雄いと奇しき者ありとて家産を傾け文字を
習はせけれバ善繼日夜勉勵して手に書卷を捨
てずされバ年漸く長ずるに隨ひて博文強識の
譽れ高く淳和仁明文徳清和の四帝に歴事して
高官に登りけりされども謹慎質朴にして苟に
も己の長所を以て人を凌ぐの心かく常に謙遜
退讓して已知らざる者の如しその文章博士た
りしとき諸の博士等互に黨派を立てて相輕蔑
し又その弟子も己を是とし人を非として爭論

の絶ゆる間おかりしかば人の誹り世の嘲り止
むふどおかりけれども善繼その中に居りて獨
り善名を失はざりけり

格言

斯邁爾斯曰く條理に達する
人は必ず讓なり

参照

藤原三守天性温恭事に臨みて明決好みて
經史を讀む常に書生を延き禮待歡を盡と

朝參して途に學生に遇へば必馬より下り
之に接を敢て富貴を以て朋友に加へず

(一五) 瞽者學を講じて明者を笑

ふ

(勉 強)

文政の頃江戸に塙保己一といふ名高き盲人あり夏
の夜門人を集めて悉く障子襖を開き清風を取りつつ書を講じけるが折節風吹き入りて燭消にぬ門人等あわてまどひてまばし講を止めてたまへ燭消にて書の見はず候と云へば保

己一笑ひてさても明者は不便あるものか燈の力を借らずしては夜書を見るゑと能はずやと云ひけるとか務めて止まざる時は盲目の者といへども猶かくの如し然るに兩眼炯炯たる人にして目に一箇の文字をも見るゑと能はずとは抑も何の心ぞや

(一六) 一眼を請ふて五百石を得

(勉 強)

杉山和一は大和の人あり幼にして兩眼を失ひ

(問)不具ノ人
ト雖勉強ス
レバ常人ト
異ナルコト
ナキヲ得ル
ヤ如何

けれバ江戸に來りて鍛術を山瀬琢一に學びし
に性得鈍くしてその技進まざりしかど日夜刻
苦勉強して遂にその蓋奥を極めたり將軍徳川
綱吉公和一を召してその病を療治せしめ給ひ
しに効ありければ厚く和一を賞せんとて汝何
をか欲せると問ひ給ふに和一對へて臣願くは
一つの目を得たく存じ候といふ綱吉公慙れに
をほされ吾能く汝に一目を與んとて宅地を本
所一つ目の里に賜ひ祿五百石を與へられける

後關東總錄檢校とあり大にその術を國中に擴
めけり

格言

勃古斯敦曰く他人より一倍
の勞苦をなさば他人のなせ
る事をなす得べし

參照

大和國式下郡永井佐平の女幼にして明を
失ひ長ずるに及びて裁縫を學ぶに數月に

して其綱領を了得せ歲月を経て愈其業に
熟練し其巧妙あるまど具眼者に異あらざ
りしと云

(一七)人を打津者は我身を打津

(沈 勇)

(問)汝等突然
他人ヨリ鹿
暴ノ待遇ヲ
蒙ラバ已亦
之ニ應ズル
ニ鹿暴ヲ以
テセンカ將

大納言行成卿いまだ殿上人ありける時中將實
方朝臣殿上に参り會ひたるに實方の中將何事
も言はず行成卿の冠を打ち落とし庭に擲ちたり
行成卿周章てたる色もかく徐に主殿司をよび

ト其事由ヲ
推問シテ然
ル後之ヲ處
セン歟如何

冠を取らせ之を冠りて守刀の筭抜きいだし鬢
の亂をくろひ居直りていかある故ありて忽に
かかる亂冠に預るべき事更に覺へずまづ其の
故を承りて後に如何にも致さんとして詞穩かに
言はれけれバ實方の中將は何の答もせずして
其の座を立ちたり折節一條天皇小部より御覽
ありて行成は優ある者ありと仰られて其の頃
藏人頭の闕ありしを人多く望みけるに許し玉
はずして行成卿を遙か末席より引き擧げて任

ぜられ實方は歌枕見て參れとて中將を陸奥守にして其の國に遣されたるがやがて彼所にて歿したり一は寛洪によりて官を得一は龜暴によりて官を貶されたり

(一八) 怯き犬は敵に吠ゆ (沈勇)

ある一人の子供その先生に隨ひ或村を通行せし折二三疋の瘦犬恐しき氣色にて之に吠掛り或は咬付かんとせしかバ子供は杖を振廻し或は石を擲ちてゐれを追へバ直に逃去り一歩行

(問) 怯夫ト勇者トハ其舉動如何ナラン

きて振返れば又後より附來りゐれを如何ともせべからず兎角をる間に或る農家の畑の處迄來りければ彼の瘦犬も遁け去りたり然るにゐの畑の傍に肥へたる一疋の飼犬日向に温まりて熟く睡り居たり子供は復大に恐れ先生の側に寄り付き其の處を通り過ぎしに犬は優優として此方を見向もせざりけり兩人は又進て鳥獸を飼ふ牧場に至りしかバ一群の鵝鳥人を見て鳴き騒ぎ何れも長き頭を揚て兩人の方へ向ひ來

る其の有様れかしくも又愚かに見にけれバ子供は打笑ひ杖をもて其の頸を打ちそのまま通り過ぎて少しく先きの方へ至ればあゝには數疋の牝牛一疋の牡牛に伴ふて群り居たり子供は此の體を見て又少しく恐るる様子ありしかども牛は平氣にて草を喰ひ其の頭をも揚げざりけりされバ子供は先生に向ひ彼の飼犬も牡牛もれどあしくして鵝鳥瘦犬の如くからざりしは實に仕合ありさりながら同じ獸畜にて斯

く相違あるは何故あるやと尋ねれば先生懇に子供に説き諭していへるよう都て弱く賤しき獸畜は自分の身に頼むべき力もかく勇氣もなき故始終他の者より害を加へられんことを恐れ我より先きに他を犯して身の災難を遁れんと思ひ動もそれバ何物に向ても騒がしく敵對せれども其の實は憶病にして相手の者を恐るるかりあれに引替へ自分の身を護るだけの力を備ふる畜類は己が身を頼みにして他の者を

疑はざるゆゑいつも平氣にして自分の位を失はざるありふは唯畜類のみならず人も亦然り弱く賤しき人物は常に他人を猜ひ懼れて妄りに罵り憶病の餘りに人に失禮をも加へて只管身構をせんとするものあり唯大量の君子は然らずその心常に静にして人を犯さず人を害するふとかく人に害せらるるふともかく或は僅に害を被るふとあるもふれを捨てて問はず其の故は假令ひ害を被りたりとも遽に彼是とふ

れを取糺さざるも元自分の身に頼むべき力量あるに由り何時にても然るべしと思ふときに事の條理を取糺さんとせる覺悟あればあり

格言

語に曰く内に省て疾くからずば何をか憂ひ何をか懼れん

參照

唐の婁師德その弟に謂て曰く兄弟榮寵過

盛なるは人の疾む所あり何を以て免れん
 弟の曰く自今人某の面に唾をど雖も之を
 拭はんのみ師徳愀然として曰く此れ吾が
 憂を爲せ所以あり人汝が面に唾をるは汝
 を怒るなり而して之を拭へば其意に逆て
 其怒を重ぬ唾は拭はざれども自ら乾く正
 に笑て之を受くべき耳と

（一九）西行銀猫を童子に與ふ

〔廉潔〕

僧西行四方に歴遊して鎌倉を過ぎし時途上に
 て將軍頼朝卿に逢ひけるが卿侍臣をして其の
 名を問はせめ因て之を府中に召し和歌及射術
 の事を問はれけるに西行辭し曰へるやう弓矢
 の業は組筥裘を繼げども遁世の時先祖秀郷以
 來傳ふる所の書籍は悉く焚捨てたり又和歌の若
 きは時に感む物に觸れ僅かに之を詠ずれども
 微旨蘊奥は素より解せざる所にして以て對ふ
 べきなしと頼朝卿固く請ひて己まざれば西行

之が爲めに終霄弓馬を談じ翌日直に辭して去る頼朝卿固く留めらるれども聽かず因て遣るに銀猫を以て西行之を受けて出づ適門外に兒童の戯れ遊べるを見て之に銀猫を投げ與へて去りけるとぞ西行俗の名は佐藤憲清と呼び勇敢にして射技を善くし兵法に通ず鳥羽上皇に仕へて左衛門の尉に至りしが年二十三にして遁世したり

(二〇) 釵を得て吏に返す

(廉憲)

宋の世に彭思永字は季長と云ふ人あり齡八歳の時朝未明に出でて學校へ赴かんとせるに圖らず一つの金釵を拾ひ誰が落したるやらん必來りて尋ぬるものあるべしと思ひ其の處に立ちて待つ程に一人の官吏と覺しき男來りて其あたりを徘徊せるみと稍久しかりしかば是あるべしとて傍にさし寄り足下は何をか求め給ふやと問ふに釵を落したれば尋ぬるありといふさらばみそと思ひ其の釵の模様を問ふに其

(問)遺物ヲ其
ノ主人ニ返
シタル時主
人若シ謝物
ヲ贈ラバ之
ヲ受クベキ
ヤ否

のいふとまろ先に拾ひたると符合したりければ
銀を出して返し與ふるに吏喜びて謝せむに
數百錢を以てしたりしかバ思永笑ひて受けず
我れ利を欲せむ程からど素より銀を返さざる
べしさらば數百錢には遙かにましたる利あり
といふに吏大に驚き其の清廉を稱歎して去り
しどかん

格言

語に曰く伎らず求めずば何

を以てかよからざらん

參照

隋の趙軌の東鄰に桑あり樵其家に落つ軌
人を遣り悉く拾ひて其主に還せ後夜行を
其左右の馬逸して田中に入り人の禾を踐
踏せ軌馬を馳めて明を待ち禾主を問ひ直
を酬ひて去る

(一一)朋友の訓戒によりて性行

を一變す

(改過)

有名ある神學者巴禮は偶然の事に由てその行を改めたり巴禮天性の才智優れしものありしが堪比日のクライスト、ヨルレーヂ學校に在りし時懶惰ありしに加へて浪りに錢財を費したりされば三年を経たりけれども進歩甚少し去れども巴禮益を放逸の行ありしかバある日一人の友巴禮が臥床の傍に立て言けるは巴禮よ我は足下の事を思ふて睡るゑと能はず足下はいかなればかかる愚かある舉動を爲し給ふぞ

(問)朋友ノ懶惰放逸ナル者ニ遇ハバ之ト絶タンカ之ヲ諫メシヤ

や我は放逸を爲しても財を費やそほどの資力あり又我は懶惰にして居らんとせば居らるべし足下は貧しくして之を爲すゑと能はず且我は勉め試みて何事をも能し得ず足下は爲すゑと有れば能せざるゑとかし我は之を思ひて終夜床に横はれども瞋を交へざりき今我れ巖正に足下を訓誡せんと欲して來れり足下もし懶惰にして愈從前の行を改めざれば請ふ足下との交を絶たんといひしかば巴禮は深く其の言に

感じその性行俄かに一變して勤勉學習の功を
積みたれば後來著述家及神學者として遍く一
世に名を顯はしけり

(二二) 孝悌なる人の談話を聞いて

兄弟の恩愛を全くす(改過)

宋朝の時に施相之、施詔之といふ兄弟家を分ち
て住みけるが田地の境界論よりして遂に骨肉
の親しみを失ひ親類朋友より度度媾和を勧め
たれども其紛争を解くまど能はざりしが同村

問人ノ友愛
ナル談話ヲ
聞テハ如何
ナル感覺ヲ
起スヤ

に嚴鳳といふ人ありかねて孝友の聞に高くし
て其の兄に事ふること父に事ふるが如く親敬
の誠至らざる所おかりきある時施詔之用事あ
りて門外の川より便船して他郷へ赴かんとし
てはしたあく嚴鳳と船中にて落合ひたり四
方八方の談しの末互ひの家産の事に及びたる
に施詔之彼の境界論の事を云出して兎かく兄
の非をあげつらふに嚴鳳つくづく聞き眉を
攢めていひける扱も御兄君は膽略才幹ある方

さまふりそれにつけても我が兄のいひがひあ
さ常に我等にのみ家産の事をとりまかさはせ
てれのれ差圖せんともせず我が家には在來の
田地何町歩ありや我が家の財物は幾何あるや
もまらぬげあるこそ片腹痛けれ萬の一分にも
我が兄にして御兄君の如き才幹あらせたらん
にはたどひ我等の田地を悉く奪はれても本意
からんものをといひければ施詔之其の言に感
動して思はずも涙を流し深く既往の非を悟り

てそぞろに悔悟の念に堪へず俄に他行を止め
彼の嚴鳳を請ひ伴かひて兄の許へ赴き泣泣一
伍一什を語りて深くみづから悔いたる旨を陳
べ此迄の罪を謝しけるに兄もまた大に感入
りて遂に互ひに曩には相争ひける田地を譲り
あひて取らず兄弟いと睦まじくありてあはれ
名士どかりけるとかん

格言

洗心輯要に曰く此の心一び

悔れば愆を消すこと氷雪の如く

參照

甄琛と云者あり進士に擧げられに都に入る歳を積んで奕棋を好み通夜奴をして燭を執らしむ奴睡る甄怒りて杖責を加ふ奴の曰く郎君今父母を辭して仕官を若し書を讀むが爲にして燭を執らば敢て罪を逃れず乃棋を圍みて日夜止まず豈是京に向

ふ意からんや而して肆に杖罰を加ふ亦理に非らずと甄悵然として慙感し遂に棋を癡し學を勉めて倦まず

(二三)他人の子を育みて後幸を得

(仁愛)

佛蘭西の或る處にマルセルとていと貧しき男ありけるが二人の幼兒をのみして夫婦とも身まかりけり諺にも盲人の杖を失ひ幼兒の母に離れたるほど便りおきはあらじといへるにま

(問)已レ貧困
ノトキハ人
ヲ恤フルノ
進アラザル
歎如何

して一時に父母に離れたるおればただ泣き叫ぶのみにて如何にも詮すべあるべくもあらず其ままたりありおんには飢ゑて死せべかりけるに其の近邊に住居せる職人にロペールといふ人ありけり三人の子供を持ちけるが其の妻に語りてマルセルの孤兒の餓ゑ死おんは不便かり救ひとりて養はんは如何にといふに妻は我家貧きがうへに三人の子供さへあれバおれのみぞら既に暮しの難義あるに如何にしてか

また二人の子供を養ふべきといへどもロペールは我等二人の一日に食ふべき食料四分の一宛を分ちて彼等を養ふべしとて遂にマルセルの孤兒二人を引取りけるさらぬだに足らぬ勝ちある身代あるに俄に二人口をまじられたればおかおかに引足るべくもあらぬを夫婦力を合せて働らき兎角して育てあぐる程に漸く年月を積みて自他五人の子供みお生長していづれも職人となり働き得たる賃金は悉くロペールに

六四
贈りければ今まで貧しかりけるロペール俄かに富人にありけるとおん

二四米を賣りて利を貪らず

(仁愛)

宋國廣陵といふ處に李班といふ米商人ありけり其の心極めて正直を旨としてしかも慈心深き男あり其の頃同地の米商人に一種の惡弊ありて往往賣升と買升とを分ち賣升には小あるを用ひ買升には大あるを用ふる習はせありし

(問) 仁愛ヲ以テ人ニ物ヲ施與スルハ損益如何

が李班一人は然らず賣買ともかからず一つの升を用ひて去かもわが手にて米をはからず升を米買ふ人にさづけて其のまにまにはかりとらせけり且つまた年年我家のくらし方に用ふる入費の多寡をあらかじめ精算して父母の養ひに供ふるに足る以上は米の時價の如何に拘はらずして廉きを旨とし賣りたりければ仲間の米商人等はいづれもみふ李班を迂濶ありとて口口に笑ひ嘲りけるが李班の米廉くして其の

評判高ければ米を買ふ人はみみ李班が家に來りし程に其の商賣大に繁昌して曩に嘲け笑ひし仲間のものよりは遙かに多くの利益を得て其の家を富ましけるとぞ

格言

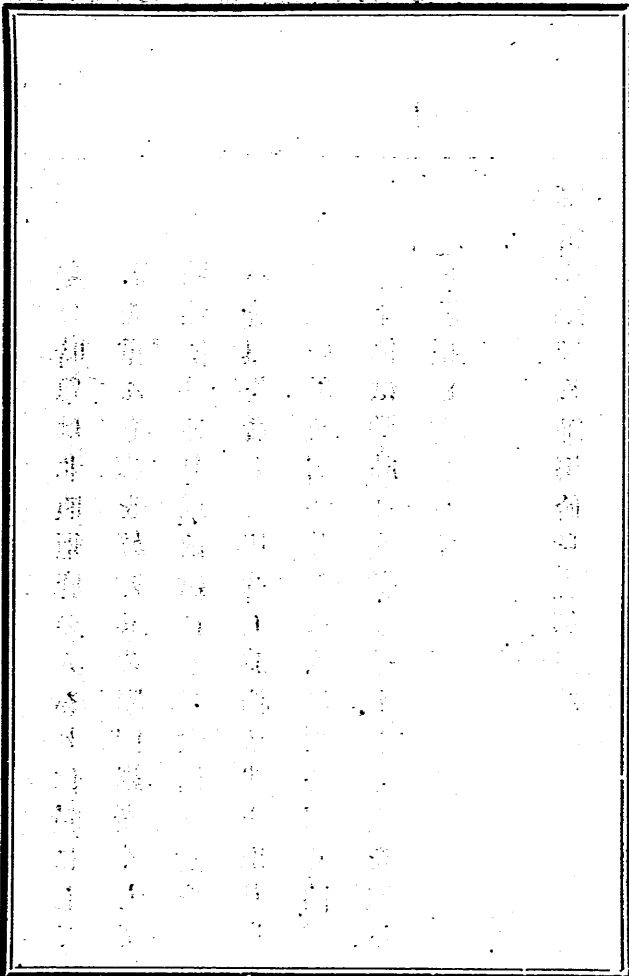
西諺に曰く人に親切を盡すは我が身に親切を盡すに同じ

参照

魏の時舉は北直鉅鹿の人あり仁愛にして義を重んじ施を好む其の家田産多くして積穀餘りあり歳凶歉にして穀價騰貴をれば倉稟を發して出糶し時價の半を取り以て人の急を周へり常に人に語て曰く凶歳の半價は豊時の全價あり少しく之を取ると雖損と爲ならず

尋常小學校教師用脩身書第三終

K121.1



明治二十年二月十日版權免許
全 年三月 出版

定價金十五錢

編纂兼出版人 熊木縣士族 辻 敬 之

編纂人 東京府平民 岡村增太郎

東京神田區
松永町十九番地

發兌所

教育書專賣所

普 及 舍

東京下谷區
練塀町十四番地



31
8
72

x

大日本教育會圖書館

九	一
七號	二架
八册	三函